



地域とつながる人権教育が目指すもの

令和6年度課題別研究会

「地域とつながる人権教育」



10月23日に令和6年度課題別研究会「地域とつながる人権教育」を、県立奄美図書館会場とオンラインのハイブリッドで開催しました。

原井一郎さんの講演「与論島集団移住と『大阪ヒンギロヤ』の世界～奄美42万人の出稼ぎ・移民考～」と、大島北高等学校の「聞き書きサークル」の実践発表から、改めて、地域とつながる人権教育の意義について学ぶ機会となりました。

実践発表「北高ならではの学び」

大島北高等学校では11年前から、地域の方々と交流し、地域資源から学ぶ活動に取り組んでいます。他者や多様な文化・価値観を認め、尊重する心を育むとともに、情報収集・整理力やコミュニケーション力などの育成による自尊感情の高揚など人権教育の充実にもつながっています。

【活動内容】

高校生が、地元の長老や名人から、地域の文化や昔の話を聞き取り、それを文章に書き起こして、冊子などに残していく地域貢献・伝承活動

【活動目的】

- 奄美の貴重な社会・文化遺産を尊重し、後世に受け継ぐ。
- 奄美のよさや課題等を発見・考察することで、自分の進路や将来に生かす。

【「聞き書きサークル」で学んだ卒業生の寄稿】

高校時代の聞き書き活動から5年経った今でも、東京の奄美居酒屋やお話を伺いたい人の場所へフィールドワークに出向き、文字に書き起こしている。聞いた話を文字に書き起こすと不思議なことがよく起こる。例えば、耳で聞いていた時は気にしていなかったことが、文字にして可視化することで「この人はこういった時代背景があったからこのような発言をしたのかな」や、「そういえばこの発言をした時にこういった表情をしていたな」など、新たな好奇心や発見が生まれるのだ。

(中略)

インターネットが普及した現代、ショート動画がよい例であるように簡略した情報を映像で伝えることがトレンドになってきている。活字離れが進み文字から思考する機会が失われてきている今だからこそ、「聞き書き」という行為を私たちは再認識することが必要だと思う。

(中略)

奄美の高校生が聞き書きをする意義とはなんだろうか。それは、「世界の誰もがまだ知らない奄美の文化・歴史を初めて他者に伝えられる人材になれる」ということである。(中略)一人一人が紡ぎ、発信していけば奄美に対する恩返しになるとともに、気付けば聞き書きという行為が自身をどこか素晴らしい場所へ連れて行ってくれるかもしれない。

「聞き書き」は単に事実をなぞる行為ではなく、その言葉の背景にある思いや願いを想像し、その人の生き方の本質にまでたどりつくものであるということ、さらに郷土に対する誇りを育み、「伝える」という行為によって、自分の生き方につながっていくことがうかがえます。

地域とつながる人権教育の学びとは

子どもたちは学校や地域で多様な人々に出会い、生き方に触れます。そこから何を学び、学んだことをどのように生かしていけばよいのでしょうか。先達が刻んできた歴史や、その過程で味わってきた喜びや苦しみが脈々と今の私たちの生活につながっている。この事実を自分の在り方や生き方にどのように反映させていくか、考えを深められる学びを構築することを大切にしたいものです。学びを積み重ねていくことで、自分が生まれ育った地域(故郷)への誇りを更に高めることを目指しましょう。



聞き取りをする高校生

おわりに

「聞き書きサークル」での活動をめぐり、現在教職を目指している大学生は、次のように振り返っています。この学びが継続されることを願います。

地域の魅力や尊さに気付くなどできるのは聞き書き活動の醍醐味です。(中略)大学での参加観察実習では、子ども理解のために、どのような地域で育ったのか、どのような経験をしてきたのかなどを子どもたちに聞くなどして親睦を深めていきます。その時に質問の仕方を工夫することで子どもたちが楽しく話せるように意識しています。他にも、課題で授業づくりをする時に地域での生活経験から知っていることを授業に取り入れた方が、学びが深まると考え、教材として地域行事を取り入れることがあります。子どもが住む地域によって子どもの実態が変化するので、その地域のことについて知ることが不可欠だと感じています。